

HELLO PSJ

「太平洋から大西洋へ」

Mriganka Sur Laboratory, Picower Institute for Learning and Memory
Department of Brain and Cognitive Sciences, Massachusetts Institute of Technology
杉原 弘記

皆様、こんにちは。杉原弘記と申します。生理学研究所の小松英彦先生のご指導で学位を取得(2001年)した後、現在、アメリカでポスドクをしております。最初はUCSF(サンフランシスコ、太平洋側)で、現在はMIT(ボストン、大西洋側)で末席を汚しております。ちょっとそんな紹介など。

UCSF

カリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)ではKen Millerのラボに所属していました。唯一の生理屋さんとして四連電極を用いた第一次視覚野の局所回路に関するプロジェクトに参加していました。え、Kenって実験してたの?と聞こえてきそうですが、してたんです。理論がメインですが少人数で生理実験をしているグループがありました(過去形なのはKenは現在、コロンビア大学に移動し、それとともに理論に専念することになったからです。ちなみにそれがラボを変わった理由です)。残念ながらあまり生産的なグループではなく、Kenの移動に伴い、少し中途半端な形でプロジェクトは終わってしまいました。しかし、先週(2月23日付)、元同僚の仕事がNatureのarticleに載りました。ご覧になってくださった方も多いのではないのでしょうか。Michael Strykerの名前がありましたので実験はMichaelがして理論がKenかと思われた方が多いと思います。実験もKenのラボでやりました。FYI(for your information)というか、宣伝とい

うか、ということで。

KenはMichaelとともにケック・センターというUCSF内の組織に属していました。ラボ数は14で、Steve Lisbergerがセンター長です。他にはMichael MerzenichやAllison Doupeとスターぞろいのセンターです。ちなみにケック・センターは非常に狭いです。教授の部屋も秘書さんの部屋かと思うぐらいです。ポスドク・学生のオフィススペースもラボ毎ではなくごっちゃ混ぜです。机の取り合いです。おかげでラボ間の垣根は驚くほど低いです。共同研究も自動的に始まっちゃうぐらいの勢いです。示唆に富んだ手狭感でした。もうすぐ新しいキャンパスに移ってしまうそうですがラボ間の垣根の低さは維持していただきたいものです。

MIT

上述のような理由で昨年6月からMITのMriganka Surのラボに移動いたしました。引き続き第一次視覚野での仕事です。ここでは第一次視覚野の視覚特性に対して注意や期待などが与える影響について研究するチームに属しています。Surのラボは非常に大きなラボで、ポスドクが現在13人前後います。ひとつのラボで分子生物学からサルの電気生理までを行っているラボはそう多くはないのではないのでしょうか。用いているテクニックも遺伝子操作から電気生理、光学測定法、二光子励起顕微鏡法、果てはfMRIまで非常に幅広いです。複数のラボと共同研究を行っているか

らという理由もありますが、ひとつのラボでひとつの学部のような多様さです。そして、それぞれのプロジェクトを十分に理解している Mriganka も驚異的です。

ちなみに Mriganka は脳認知科学部 (Brain and Cognitive Sciences, BCS) の学部長です。そして、BCS は昨年(2005年)の10月に新しい建物(46号棟)に移動いたしました。46号棟は BCS Complex といって、BCS と2つの研究所が一緒に入っています。ピコワーとマクガバンです。ピコワーは利根川進先生が所長で、また、理研とも関係は深いのでご存知の方も多いいのではないのでしょうか。Mriganka もピコワーにも属しています。ラボ数は10で、他には Earl Miller や Matthew Wilson, Mark Bear など、こちらもスターぞろいです。マクガバンには13のラボがあり、所長は Robert Desimone です。Nancy Kanwisher や Tomaso Poggio, Ann Graybiel, Emilio Bizzi, Michael Fee などなど、こちらも圧倒されます。

BCS にも47のラボ(ピコワー、マクガバンと重複)があり、あの Peter Schiller のラボがあります。

46号棟は中央に大きな吹き抜けがある美しい建物ですが、このようにサイエンスの面でも非常にレベルの高い建物です。学生セミナーで聞いた話が次の週には Nature に載ってたなんてこともあります。どうしてこのように生産的なのでしょう。個々の教授の能力が高い、世界中から優秀な学生やポスドクが集まってくる、頻繁なコミュニケーションを通じて最新の情報が集まってくる、多くの優秀なラボ間の相乗効果、流行に乗るのがうまい、プロジェクトのポイントをつかんでまとめるのがうまい、得られた実験結果から可能な限り魅力的なお話を引き出してくる、などいくつかの点はあるのでしょうか。あ、それだけあれば十分ですね。いずれにせよ、このようなよい環境にいる間にいろいろと吸収できればと淡い期待を抱いております。



Sur ラボの面々 (2006年3月現在)。後列、右より5人目が Mriganka Sur 教授。右隣は Jitendra Sharma 助教授 (MGH)。前列右より3人目が筆者。ラボのホームページは <http://web.mit.edu/msur/>